

筑波大学日本文学会会報

第3号

昭和53年11月

筑波山と富士山	伊藤 博	一
翻刻資料・田村伝記	伊藤 博	二
日本文学会だより		四
卒業生だより		五
研究室だより		六
会員研究業績		七
会員名簿		八

筑波山と富士山

伊藤 博

深く曇ったり雨が降ったりしないかぎり、筑波大学の東南には、筑波山の双峰がいつもくっきりと見えます。大学は、この山に見守られて五年を迎えました。

筑波大学日本文学会の本部である日本文学研究室が、人文社会学系棟の六階に居を構えてから、二箇月ばかり後、昨年十二月下旬のことでした。教授会の最中、人に注意されて振り返ってみると、北西の方向に、夕映えに気高く浮かぶ富士山の白い姿が認められました。この視界の中には、感覚の上で三、四百米ばかり右に、まるで富士山と相擁するかのようになり、筑波山がいつもの山容を黒く浮き立たせているのでした。

これは、私にとって感動に駆られる発見でした。『常陸風土記』（筑波郡）の著名な話、日暮れて、富士山に一夜の旅宿を乞うてことわられた神祖の神が、ついで筑波山に宿りを乞うたところ、ここでは歓迎されたという話を思い出したからです。たまたま奇神のように現われ出る冷厳な富士の山、常時土地に住む人々を包む筑波の山、しかも、時折、近くに同じような高さで並び立つ山、こういう状況を体験できた常陸国原の人々のあいだにこそ、右の説話は生まれえたのだ、と直感したからです。古い話が真実を投影していること知りえたことは、大学に来てから感じた最も大きなよろこびといっても過言ではありません。

日本文学会三周年を迎えて、ささやかな一件を報告し、ご挨拶と致します。筑波山のあたたかさ、富士山のきびしさにあやかりながら、学会の発展に貢献したいものと思えます。

皆様のご協力をお願い致します。

昭和五十三年十月五日